

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 岡井 佑

論 文 題 目


Shuffling babies and autism spectrum disorder

(Shuffling babies(いざり児)と自閉症スペクトラム障害)

論文審査担当者


名古屋大学教授

主 査 委員

勝野 雅央 


名古屋大学教授

委員

木村 宏 

名古屋大学教授

委員

内田 広典 

名古屋大学教授

指導教授

高橋 義行 

## 論文審査の結果の要旨

座位のまま臀部を擦って移動するshuffling は自立歩行に先行する移動方法である。Shuffling baby は歩き始めが遅くとも、良好な転帰を示すと考えられてきたが、長期的な発達予後は明らかにされていなかった。今回、shuffling baby の中にはAutism spectrum disorder (ASD)を合併する群が存在し、その要因にはASD 児の筋緊張の低下や特異な運動発達の経過、感覚の異常が関連している可能性が示唆された。Shuffling baby の診療においては筋緊張の低下や運動発達を重視した診察をする傾向があるが、ASD の有無に留意し、視線のあいにくさや始語の遅れ、基本的な習慣や人間関係の成長に注意を払うことが重要であると示された。





本研究に対し、以下の点を議論した。

1. Shuffling の原因はまだ不明だが、非ASD 群で家族歴が高いことから、遺伝子変異などが因子の可能性はある。親の過保護や親の態度によってshuffling を含む運動発達に影響するという報告もあり、多因子が影響する。家族歴があった群となかった群では運動発達に有意差はなかったが、家族歴がない群にASD群が多かった影響もあり、家族歴がない群の就学前の精神発達の指標とも言える社会性は低かった。
2. ASDを含む発達障害児では特異的な運動発達を示すことがあり、筋緊張の低下や感覚の過敏性のために運動発達が遅れることがあるが、多くはキャッチアップする。また、粗大運動はキャッチアップするが、ASD群の中には一般の集団より高率に協調運動が苦手な群が存在し、協調運動障害の併存があると言われている。今回の研究ではshufflingを行うASD群、非ASD群ともに運動発達が遅れはあったが、成長とともにキャッチアップしていくことが示された。
- 3,4. 感覚運動療法や抗重力筋を活性することが粗大運動獲得に影響したという報告があり、それらは介入時期が早いほど効果的だった。早期療育は運動発達、精神発達両方の発達を促したという報告もある。運動面ではshufflingそのものが減るだけでなく、粗大運動の獲得が早まる。精神面では、ASDを含む発達障害の特性を早期に支援者が理解することで、環境調整を行い、障害の特性はあっても社会に適応する力を養えると報告されている。

本研究は、良好な転帰を示すと考えられてきたshuffling baby の中にはASDを合併する群が存在し、早期に介入することでその発達予後を改善し得るという知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	岡 井 佑
試験担当者	主査 勝野雅央 	副査:	木 村 宏 	
(試験の結果の要旨)	副査:	内田 広夫 	指導教授	高橋 義行 
	<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Shuffling babyの遺伝的背景と精神運動発達の関係について</li> <li>2. Autism spectrum disorder (ASD)の運動発達について</li> <li>3. 治療介入にはどのようなことが考えられるのかについて</li> <li>4. 早期に介入する利点について</li> </ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、小児科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>			